

ますだ まさのぶ
増田 将伸

共通教育推進機構 准教授
博士(人間・環境学)／京都大学

📄 ホームページ URL

<https://gyoseki.kyoto-su.ac.jp/ktsuhp/KgApp?kyoinid=ymsgdyoggy>

主な研究業績

- 増田将伸 (2020) 「正解到達型グループワークにおける解答の不一致への対応」『日本語学論学会大会発表論文集』第15号, pp.215-218
- 増田将伸 (2018a) 「ずれた発話をどう「聞く」かー授業内グループワークの参加者による「受け流し」ー」村田和代(編)『聞き手行動のコミュニケーション学』ひつじ書房, pp.91-109.
- 増田将伸 (2018b) 「連鎖組織をめぐる理論的動向」平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実(編)『会話分析の広がり』ひつじ書房, pp.35-61.
- 増田将伸・中井陽子 (2017) 「米国における会話データ分析の変遷」中井陽子(編著)・大場美和子・寅丸真澄・増田将伸・宮崎七湖・伊智鉉(著)『文献・インタビュー調査から学ぶ会話データ分析の広がり』ナカニシヤ出版, pp.54-63.
- 増田将伸・城綾実 (2017) 「「わからない」理解状態の表示を契機とする関与枠組みの変更」片岡邦好・池田佳子・秦かおり(編)『コミュニケーションを枠づけるー参与・関与の不均衡と多様性ー』くろしお出版, pp.27-46.
- 増田将伸 (2011) 「「どんな／どういう十名詞」型質問ー応答連鎖における優先構造」『言語科学論集』第17号, pp.143-159. 京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座.

研究テーマ Research theme

会話分析の手法による人間の相互行為の仕組みの発見・記述・応用

概要 Overview

会話分析 (conversation analysis) の手法では、実際の会話の録画データを繰り返し観察し、その場で起こっている相互行為の仕組みを記述する。発話が会話中で出現する位置などの会話の構造や、吸気音や身ぶりなどの微細な非言語的行為にも注目することで分析を正確なものにし、またデータから観察される話者自身の志向性に対する分析の基盤を置くことで、分析を実態に即した妥当性のあるものにすることができる。筆者はこれまで、分析を通じて以下のようなことを明らかにしてきた。

・インタビュー場面での質問ー応答のやりとり

インタビュアーは、質問発話を使って話題を設定し、インタビューを先に進める。しかし、それによりインタビュイーに求める答えに制約を課すことになるので、インタビュイーの関心や状況からずれた設定をしてしまうと、インタビュイーは答えにくくなる。また、「どうですか」という質問のように、話題を絞らないことでインタビュイーが答えにくくなる場合がある。インタビュイーの答えにくさは、応答の遅れや、「あ」「ええと」「もう」等のようなささいな語の使い方によっても表されている。

・話し合い場面ですれが生じてしまう原因

話し合い場面ですれは、様々な意味での共有の不足により引き起こされる場合が多い。話し合いの方法について参加者への周知が不十分で、参加者が思い思いの方法で話すのでかみ合わなくなってしまう場合や、直前のやりとりの内容や関心に合わない発話をするのですれが生じてしまう場合がある。

・協働学習場面での学生の協働の仕組み

課題が難しい場合や、人間関係面での遠慮がある場合など、学生が話し合いを主導しない場面がよく見られる。しかしそうした場面でも、教科書を一人で声に出して読む、「わからない」と言葉を発するなどの独り言めいた発話をきっかけに、協働のきっかけが作られている場合がある。

応用分野 Application areas

コミュニケーション場面の設計・分析・改善：

会話分析の手法によって会話データ中の話者の志向性を観察することで、場の参加者の関心の所在、誤解の原因、前提知識の異なる参加者間の認識の齟齬の存在をある程度指摘することができる。このようにして、話し合いや、授業等でのグループワークの進め方を改善し、参加者の相互理解や満足を促進するのに研究成果を応用することができる。

共同研究等へのニーズ Need for joint research

会話を含む場面の多角的分析：

会話分析により得られる知見を他の手法（質的分析、量的分析、実践知）による分析と接合し、共同研究を通じて多角的にその場のコミュニケーションの特性を明らかにすることや、その知見の実践的応用に関心がある。